

**「家庭・地域とともに子どもたちを育てよう」**  
一校外の人的資源を活用して、子どもたちに豊かな体験をさせようー  
**春日井市立鷹来小学校**

**1 実践のねらい**

- (1) 地域の目で見守ることにより、子どもたちの安心・安全を確保するとともに、児童が常に見守られていることに対する感謝の気持ちを持ち、それを表現する方法を身に付ける。
- (2) 児童が地域の異なる世代の人たちと関わることにより先人の知恵について学ぶ。
- (3) 音楽鑑賞会等、児童と地域の人々の共通体験の場を設定し、地域に根ざす学校づくりを進める。

**2 実践の内容**

**(1) 「世代交流会議」**

本校では、これまで学校が主体となって地域と連携した取組を行うことが多かった。本事業では、地域の区長、PTA役員等いろいろな世代の人で構成する「世代交流会議」において行事等の検討を行うことにより、これまでの取組の改善を行うことができた。

**(2) 「鷹来っ子を守る会」による交通安全見守り活動**

本校の通学路は道幅の大変狭い道路が大部分をしめ、歩道やガードレールの整備されていない箇所も多い。そのような状況の中で子どもたちの安全と安心を見守るため、7年前、地域の区長、町内会長、自治会長、敬老会、PTA役員の方々からなる「鷹来っ子を守る会」が組織された。毎朝、交差点などの危険箇所や校門に多くの方が立ち、子どもたちとあいさつを交わしながら見守りを続けていただいている。

活動は雨の日も風の日も雪の日も休まず行われている。本校では謝意を表すため、帽子・ベスト・ウインドブレーカー等の物品をお渡ししている。

また、昨年度からは、児童会主催による「見守りありがとうございますの会」を開催している。この会は、日頃見守っていただいている方々に、児童からのお礼の言葉や心を込めた出し物等で感謝の気持ちを伝える場であるとともに、謝恩の大切さとその方法について学ぶよい機会となっている。

**(3) 地域ボランティアによる米作り支援**

本校では、地域の方々から約700平方メートルの水田を借用して、5年生児童が米作りを体験し、他学年児童はその見学を行っている。

毎年、JA職員の方による事前指導の後、6月上旬に田植え、夏期休業中に草取り、10月中旬に稲刈りを行うが、その間の管理は地域の方とJAに協力していただいている。

米作りは、児童や学校だけの力では到底できることではなく、地域の方々のご協力があってこそ、本校児童は貴重な体験をしながら、食物や農業に携わる人々への感謝の気持ちを育むことが可能となっている。



毎朝の見守り活動



見守りありがとうございますの会



地域の方々による米作り支援

#### (4) 児童・保護者・地域住民を対象とする音楽鑑賞会

本校では、数年来、児童・保護者を対象とする音楽鑑賞会を開催してきたが、今年度は地域の方々にも参加を呼びかけた。その際には、回覧板の準備などで、町内会長・自治会長の方々にもご協力いただいた。名古屋フィルハーモニー交響楽団員をはじめとするバイオリン・ピアノ・バイオリンの3名の演奏者の奏でる生の音楽により、子どもたちは音楽の魅力を再発見し、今後の学習に対する意欲を高めることができた。

また、児童と保護者とが共通体験をもつことにより、家庭での話題づくりの役割を果たすとともに、子どもたちが、地域で出会う人たちとコミュニケーションをもつ新たなきっかけになることも期待される。



絆を育む学校づくり音楽会

#### (5) 地域各区・地域商店街による餅つき大会

毎年12月中旬に校庭を会場として、地域各区及び商店街が主催する餅つき大会が開催され、児童・卒業生・保護者・地域住民合わせて1,000名近くが参加する大きなイベントとなっている。

子どもたちは、石臼で餅をつき、つきたての柔らかい餅を味わうという、他校区の子どもたちにはあまりできない体験をすることができる。敬老会の方々には手を取って教えていただきながら杵を振るう子どもたちの笑顔からは、心が豊かさを増していることが伝わってくる。

また、指導されている老人会の方々の笑顔からは、本校児童と地域の方々の間の絆の深さが実感される。



餅つきを体験する子どもたち

### 3 実践の成果と課題

#### (1) 成果

ア 「鷹来っ子を守る会」による見守り活動と、それによって啓発された児童の交通安全に対する意識の向上によって、登下校中の交通事故は一件も発生しなかった。

イ 音楽鑑賞会の参加を保護者以外の地域の方々にも広く呼びかけ、学校運営に対する地域の方々の理解と協力に対する感謝と、地域に根ざす学校づくりを目指す本校の姿勢を示すことができた。

#### (2) 課題

ア 本実践のほとんどは、ボランティア、特に高齢の方々によって支えられている。そのため、今後、活動を引退される方が増加することを踏まえ、善意に頼る活動を持続可能なものとしていくための方策を学校が立てていく必要がある。

イ 現在は、子どもたちが地域の方々に育てていただいている面がほとんどであるが、それを地域に返すことができ、初めて「絆」と言えると思う。日頃、お世話になっている方が困っているような場面に出会ったとき、自然に声をかけられる児童の育成を、その第一歩としていきたい。